

## シュタイナーの教育思想の形成 (2)

吉田武男

はじめに

本稿は、ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1935) の教育思想を統合的に解明する研究の一環として、彼の教育思想の形成について検討しようとする継続研究のひとつである。

筆者の見たところでは、シュタイナーの教育思想に関する先行研究の多くは、得てして教育思想や「人智学」(Anthroposophie) の思想の中で展開される理論を無批判に再構成し、形式的に彼の発言を整理するといったような傾向を強く有している。このような研究では、彼の教育思想が絶対化されてしまいがちである。

したがって、本研究の課題は、相対化の視点を確立するため、シュタイナーをひとりの人間として捉え、彼が特定の歴史的社会的状況のもとでどのように生きなが

ら彼の教育思想を形成していったかを探究することによって、彼の教育思想とその基盤にある根本的な思想の特質の一端を明らかにすることに置きたい。そこで、本稿では、彼の「第一生活期」のうちの大学卒業後から「第二生活期」の終りまでの期間を中心にとりあげるものとする<sup>1)</sup>。なお、資料として、彼の自叙伝『わが人生の歩み』(Mein Lebensgang) およびその他の彼の著作を主に用いることにする。

### 一、ウィーンにおける大学卒業後の活動

十九世紀末のウィーンは、ヨーロッパにおける学問や芸術の中心地のひとつであるばかりか、文化的にも重要な地域であった。それゆえ、ウィーンには、詩人や芸術家や学者などのさまざまなサークルが存していた。大学

卒業後のシュタイナーは、ゲーテの自然科学論の研究を続ける傍らで、そうしたサークルにも参加している。それによって、シュタイナーは彼の思想を形成するうえで少なからず影響を受けるとともに、文化人の仲間に入りつつあったのである。

また、一八八八年には、シュタイナーは短期間ながら、『ドイツ週報』(Deutschen Wochenschrift)という雑誌を編集している。この雑誌は、歴史家フリードユング(Friedjung, H.)によって創刊されたものである。シュタイナー自身も、毎週一本ずつ、社会的な事件に対する論説を書いている。あるときには、彼は当時のオーストリアの大臣ガウチュ(Gautsch)によって推進された教育改革に対して批判的に論評を加えている<sup>(6)</sup>。この仕事を通して、彼は、社会的に活躍していた人たちとよりいっそう親しくなることができた<sup>(7)</sup>。こうした仕事や人的交流は、彼がのちに社会問題を論評するうえで大いに役立つことになった。

このようなウイーンにおける大学卒業後のシュタイナーの活動は、彼の思想形成にとって重要な意味を持っているが、とりわけ教育思想の形成という点から見れば、何といっても家庭教師としての活動が大きな意味を

有していると考えられる。

シュタイナーは、まったく経済的な理由から、十五歳の頃から補習授業を受け持つというかたちで、子どもを教えるという経験をすでに持っていた<sup>(8)</sup>。しかし、シュタイナーのちに自叙伝の中で「運命は、私に教育の分野について一つの特別の課題を与えた」<sup>(9)</sup>と回想する体験は、ウイーン時代における大学卒業後の家庭教師のことである。

一八八四年、シュタイナーは、学生時代に指導されたシュレーアー(Schröer, K.)から、ウイーンの実業家であるシュベヒト(Specht)家の住み込みの家庭教師を勧められ、経済的理由からそれを承諾している。シュタイナーは、その年の七月から、ウイーンを離れる一八九〇年九月までその家庭教師を続けている。そこでは、彼は、四人の子どもを教えることになった。そのうちの三人の子どもに対しては、彼は学校の予習・復習を行うだけで十分であった。ただ、十歳くらいのひとりの少年だけは、脳水腫によって読み・書き・計算の初歩もできない状況であった。家族は、この少年についてはほとんどあきらめきみであったが、シュタイナーは、この少年の教育に特別の力を注いでいる。

シュタイナーは、この脳水腫の少年の教育のために、ときとして三十分の授業のために二時間かけて準備するといったように、かなりの努力を強いられた。やがて、シュタイナーは、その少年との信頼関係をつくることに成功している。その結果として、シュタイナーがその少年と一緒にいるだけで、彼の眠っている心的能力を覚醒させるような効果も現れたという。その少年は、二年後には民衆学校 (Vollschule) の授業について行けるようになり、ギムナジウムの卒業後、大学の医学部に進出し医者になっている。

この家庭教師の体験に関して、シュタイナーは、のちに次のように回顧している。

「運命が私をこのような境遇に導いたことに對して、私は運命に感謝しなければならない。なぜならば、この境遇にいたからこそ、私は生き生きとした方法で人間の本质についての認識を得ることができたからである。他の道を通しては、私はこの認識をこんなにも生き生きと得ることはできなかったであろう。」<sup>(6)</sup>

このように、シュタイナーは、家庭教師の体験を自ら高く評価している。この体験を通して、彼は、「人間における精神的・心的なものと肉体的なものとの関連に開

眼した」<sup>(7)</sup>のこともに、「教育と教授が真の人間認識に基礎を置く芸術 (Kunst) にならなければならないと気づいた」<sup>(8)</sup>という。こうした彼の洞察は、のちの教育思想を形成するうえで、基本的な立場になるのである。

## 二、ゲーテ研究の継続

すでに別の稿で述べたように、シュタイナーは、学生時代にゲーテの自然科学論に興味を示すようになった。

一八九二年、二十一歳の時に、彼はキュルシュナーより、『ドイツ国民文学全集』におけるゲーテの自然科学論文の編集者および註釈者に任命された。そのような仕事によって、彼はゲーテ研究に本格的に取り組む機会を得たのである。

シュタイナーは、『ドイツ国民文学全集』の第一四卷(ゲーテ全集の第三三卷『自然科学論集』)の序文において、「ゲーテが最初にひとつの事実を発見したのかということは、根本的にはどちらでもよいように思えるのである」<sup>(9)</sup>と述べたあとで、むしろ真に必要なことは、「ゲーテがひとつの事実を彼の自然観 (Naturanschauung) に組み入れていくような方法」<sup>(10)</sup>

であると力説した。つまり、彼は、ゲートにとっての自然を認識しようとする方法について注目したのである。

シュタイナーは、そのような方法に関して、「ゲート以前の自然科学は、生命現象の本質を知ることなく、無機物の際に行うことと同様に、有機体を部分の合成や外面的な特徴に従って研究していた」<sup>(11)</sup>と見做し、次のように述べている。

「……部分は、全体の本質から説明されなければならぬ。……(中略)……ゲートは、まさにこの全体の本質を明らかにすることによって、従来の誤った解釈に気づいていた。」<sup>(12)</sup>

このように、シュタイナーは、無機物の場合とは違っていたかたちで、つまり全体性を重視するというようなかたちで、有機体を認識しようとするゲートの方法に注目していたのである。

シュタイナーは、そうしたゲートの自然科学論の研究を進めるうちに、有機体を認識するための概念として、「ただそれ自体から流れ出るもののみを内実とする」というようなゲートの「直覚的概念」(intuitive Begriff)に着目し、「有機体は直覚的概念において把握され得る」<sup>(13)</sup>と見做した。さらにシュタイナーは、人間が

そのような認識に恵まれていることを、ゲートは行動によって示している、と考えた。そしてシュタイナーは、そのゲートによる有機体の認識の方法について、詳しく次のように述べている。

「非有機的なものを認識するには、自然界に作用を及ぼしている諸力の関連を見直すために、概念が順々に並べられる。それに対して、有機的なものに必要なのは、ある概念を他の概念から発生させ、そして自然の中で形成された存在として現れたものの像(Bilder)を、漸進的に生き生きとした概念の変化の中に生じさせることである。この点をゲートは、次のようなことを通して追求した。すなわち、彼は、植物の葉に関して、硬直した生命のない概念ではなく、さまざまな形態の中に現れ得るような概念である理念像(Ideenbild)を精神の中にしっかりと保持するということを通して追求したのである。人間は精神の中でこうした形態を次々と生じさせることによって、全体としての植物を構成する。つまり、自然が現実的なやり方で植物を形成するのと同じ過程を、人間は心性(Seele)の中で理念的な方法で追創造するのである。」<sup>(14)</sup>

このように、シュタイナーは、有機的なものに対する

概念、すなわち理念像に着目しながら、ゲーテの用いる方法を、植物の形成と同じ過程を自分の「心性」の中で追創造するというような方法である、と解釈した。そこには、シュタイナーは、ゲーテの中に、感覚に捉えられた像とは別に、「理念像」を見出していた。その「理念像」は、少年時代から「感覚的世界」と「精神的世界」という二つの世界の存在を確信していたシュタイナーにとって、まさに自分の考えを裏書きしていたと言える。その意味で、ゲーテにおける有機体を認識する方法は、その後のシュタイナーの認識論の研究にとって、自分の確信を正当化するための突破口になったと同時に、その後の理論的基盤にもなったのである。

やがてシュタイナーは、『ドイツ国民文学全集』の仕事を押し進め、ゲーテの自然科学論、とりわけゲーテの認識の方法を探究していくうちに、「ゲーテの認識方法には認識論が欠如している」<sup>(5)</sup>と見做すようになり、そのこともあって、それまでの彼の研究をひとつにまとめるために、ゲーテの自然科学論のすべてを編集するまえに、ゲーテに関する小著を一八八六年に完成させている。その著作は、『ゲーテ的世界観の認識論要綱』  
(Grundlinien einer Erkenntnistheorie der

Goetheschen Weltanschauung) というものである。また、その著作のサブタイトルは、「シラーを特に顧慮して、同時にキュルシュナー『ドイツ国民文学全集』における『ゲーテ自然科学論集』の付録として」(Mit Besonderer Rücksicht auf Schiller. Zugleich einer Zugabe zu Goethes Naturwissenschaftlichen Schriften in Kürschners Deutscher National-Literatur) と書き添えられていた。

『ゲーテの世界観の認識論要綱』では、シュタイナーは、ゲーテおよびシラーの記述からはじまり、「経験」(Erfahrung) や「思考」(Denken) とのかかわりにおいて「認識」(Erkennen) について考察している。そして彼は、「無機科学には体系(System)があり、有機科学には(個々の形態と典型との)比較(Vergleichung)がある」<sup>(6)</sup>と考えて、「無機的自然」(unorganische Natur) と「有機的自然」(organische Natur) とがそれぞれ自然に対する認識の方法の相違に関して説明している。さらに彼は、「無機科学の対象は自然法則であり、有機科学のそれは典型(Typus)であるように、精神科学の対象は理念(Idee)であって、精神的なものである」<sup>(7)</sup>と述べている。

に、単に無機科学と有機科学だけでなく、精神科学にまで言及している。

確かに、『ゲーテ的世界観の認識論要綱』では、その名称にも表れているように、ゲーテの認識論を考察するという体裁がとられているが、ゲーテの思想にシュタイナーの独自の哲学的解釈が加えられることによって、その内実は、かなりの部分においてシュタイナーの認識論となっている。そのことについては、当時の著名な美学者フィッシャー (Vischer, F. T.) に宛てた手紙の中の言葉が裏づけている。すなわち、シュタイナーは、「はつきり申し上げれば、何はともあれ私は認識論に対してであって、決してゲーテ研究に対して寄与しようとしたのではありません」<sup>(18)</sup>と、述べているのである。

以上見てきたように、シュタイナーは、ウィーンにおいてゲーテの自然科学論を足掛かりにしながら、次第に自分の認識論を確立していくとともに、研究者としての業績、特にゲーテ研究者としての業績を築いていったのである。やがて彼は、この業績を携えて、ゲーテの町ワイマルに移るのである。

### 三、ゲーテ研究から認識論研究へ

一八八九年、シュタイナーは、ゲーテ研究の実績を認められ、新しいゲーテ全集(いわゆるゾフィー版)の出版に協力するように招聘された。そして、その翌年の秋、彼はワイマルに移住し、創設されたばかりの「ゲーテ・シラー文書館」(Goethe und Schiller Archiv)で働くことになった。

シュタイナーは、七年間にわたって、「ゲーテ・シラー文書館」でゾフィー版のゲーテの自然科学論に関する編集と校訂と解説を担当している。さらに、そうした作業とは別に、シュタイナーは、『コッタ世界文学叢書』(Cotta'sche Bibliothek der Weltliteratur)にシュローペンハウエル (Schopenhauer, A.) の全集とパウエル (Paul, J.) の選集を収録するように依頼され、その作業にも従事している。<sup>(19)</sup>シュタイナーは、そうした文献学的な作業を熱心に続け、特にゲーテの自然科学論に関するすぐれた研究者として、よりいっそう社会的に認められるようになった。しかし、シュタイナーの内面では、地味な文献学的な作業は、彼の心を寂しくさせてしまっていたようである。また、ワイマルにおいては、作家や学者などのサークルがあり、シュタイナーはそうした

サークルに積極的に顔を出しているが、自叙伝の中で、「私の精神的世界には、訪問者はひとりもいなかった」<sup>(20)</sup>と述べているように、本当の意味で彼の思想を語るの相手を見つけることができなかつたようである。そのようなことがあって、シュタイナーにとってワイマールの居心地は、あまりよいものとは言えなかつたのである。

しかし、シュタイナーは、文献学的な作業とは別に、着実にゲーテの思想を足掛かりとした認識論の研究を発展させていた。

シュタイナーは、ワイマールにおいて認識論の研究をよりいっそう深め、一八九一年にはロストック大学に学位論文を提出し、哲学博士号を取得している。その学位論文のテーマは、『フィヒテの知識学を特に顧慮した認識論の根本問題—哲学的意識の自己了解序説—』(Die Grundfrage der Erkenntnistheorie mit besonderer Rücksicht auf Fichtes Wissenschaftslehre : Prolegomena zur Verständigung des philosophischen Bewusstseins mit sich selbst) であつた。この論文のテーマである「哲学的意識の自己了解」という表現は、「ゲーテによって据えられた認識の基盤をどのようにして拡充すべきか」<sup>(21)</sup>という、ワイマールにおけるシュタ

イナーの問題意識を顕著に示していると言つてよいであろう。彼にあっては、「ゲーテやシラーの学問的見解は、私(シュタイナー)引用者註) にとつて、ひとつの中間点である」<sup>(22)</sup>がゆえに、新たな思想的な地平が開かれなければならないのであつたのである。そこで、彼は、ゲーテやシラーではなく、カント(Kant, I.)を乗り越えようとしたフィヒテ(Fichte, J.G.)を題材の中心に選んでいる。その点から言うなら、この学位論文は、彼の研究の再出発点を意味していたのであろう。事実、シュタイナーは、「ゲーテ・シラー文書館」においてゲーテに関する研究を行い、その研究の結果としてワイマールを離れた翌年に『ゲーテの世界観』(Goethes Weltanschauung) という著作を出版しているが、その傍らで認識論の研究を続け、特に学位論文以降それに関する著作をいくつも出版している。

学位論文を提出した翌年の一八九二年、シュタイナーは、その論文を加筆修正し、『真理と学問—自由の哲学』の序曲—(Wahrheit und Wissenschaft : Vorspiel einer Philosophie der Freiheit) を出版している。その出版の意図は、その著書の緒言の冒頭に、次のように明確に述べられていた。

「現在の哲学は不健全なカント信仰に苦しんでいる。本書は、その克服のために寄与しようとするものである。」<sup>(23)</sup>

したがって、その著作の中では、カントの認識論の根本問題やフイヒテの知識学が取りあげられ、認識論の考察がなされている。特に、最後の部分では、サブタイトルに対応するかたちで、「自由」という概念に関する言及が見られる。

その著作の出版から二年後の一八九四年に、シュタイナーは、「自由」という概念を中心に据えた認識論の著作を出版している。この著作は、シュタイナーにとっての認識論に関する代表作であり、また、哲学者としてのシュタイナーの主著でもある。この著作のタイトルは、『自由の哲学』(Die Philosophie der Freiheit)というものであった。そのサブタイトルは、「現代的世界観の基本的特徴」(Grundzüge einer modernen Weltanschauung)と記述されたあとで、それに続けて「自然科学的方法による心の観察の結果」(Seelische Beobachtungsergebnisse nach naturwissenschaftlicher Methode)と付け加えられている。この著作の意図は、そのサブタイトルからも窺えるように、自然科学のよ

な厳密な方法を用いながら、「感覚的世界」と同様に、「精神的世界」を認識の対象とする「精神科学」(Geisteswissenschaft)を樹立しようというところにあった。

のちの自叙伝によれば、『自由の哲学』を書き下した当時の彼の抛り所となっていた理念の核心は、「私にとって感覚的世界は、真の現実とは認められない」<sup>(24)</sup>ということであったという。そして、彼が自分の考えを述べるときに心がけたのは、「認識の限界」(Erkenntnisgrenzen)という見方を論駁することであって、その際に「感覚から自由な思考」(sinnlichkeitsfreie Denken)が重要視された。このように、シュタイナーは、のちになって当時の考え方を説明しており、また多くの彼の伝記や解説書の中でも、自叙伝の記述をそのまま受けるかたちで、同じ趣旨の記述がなされている。<sup>(25)</sup>

しかし、実際に『自由の哲学』を読んでみると、筆者の見るかぎりでは、とても前述のような主張が、明瞭な論理的表現でなされているとは言いがたいのである。その意味では、シュタイナーの解説者の中でも、エミシヨール・ベン(Emmichoven, F.M.Z.van)の見解が、むしろ『自由の哲学』の記述の特徴をよりの確に言いあててい



るように思われる。彼は、『ルドルフ・シュタイナー』  
という著作の中で、次のように述べている。

「……『自由の哲学』の中で与えられている解答は、  
決して理論的意味での解答ではない。この本を読み、  
何らかの箇所解答を知識として取り入れようと期待  
する者は、幻滅させられるであらう。」<sup>(26)</sup>

また、シュタイナー自身も、『自由の哲学』の再版の  
時点で（一九一八年）、この著作の中で取り扱われてい  
る根本問題は次の二つである、と序文の中で明言せざる  
えなかつたのである。ひとつは、「人間の本性を直観し  
て、その直観が、生活体験や科学を通して人間に近寄っ  
てくる他のすべてのものの支柱である、ということを示  
明するような可能性はあるのかどうか」<sup>(27)</sup>という問題であ  
る。いまひとつは、「意志する存在としての人間は、自  
由を自分のものとするのが許されるのか、それとも自  
由は単なる幻想であるのかどうか」<sup>(28)</sup>という問題である。  
つまり、このような重要な事項を再版の序文であえて叙  
述し、さらには再版のかなりの部分において補足説明が  
付記されているという事実は、一八九四年発行の著作の  
記述では不明確であったということを裏づけている、と  
考えられる。したがって、一八九四年の時点では、彼の

それまでの体験と研究を踏まえて、彼の生涯にわたる哲  
学的な立場は築かれていたが、『自由の哲学』の記述  
は、多くの一般の人々に理解させるだけの明瞭な論理  
的表現には至っていないと言ってよいであらう。

しかし、『自由の哲学』にはシュタイナーの生涯を貫  
く哲学的な思想の内実はほとんど含まれており、再版の  
折に書き加えられたことを念頭に置きながらその著作を  
読めば、彼の主張したい内容は、かなり理解しやすくな  
っている。

『自由の哲学』は、二部構成になっている。第一部は  
「自由の学」(Wissenschaft der Freiheit) / 第二部  
は「自由の現実性」(Die Wirklichkeit der Freiheit)  
をテーマとしている。

第一部では、過去における哲学上の誤りが述べられた  
うえで、「概念」(Begriff) や「表象」(Vorstellung)  
や「思考」(Denken) や「知覚」(Wahrnehmung)  
などといったような哲学上の概念が規定され、それらの  
関連について言及された。<sup>(29)</sup>そして最後には、彼の少年時  
代からの関心であった「認識の限界は存在するのか」と  
いう問題について考察され、人間の「思考」の重要性が  
指摘されている。

第二部では、人間の「思考」にとって大切なもの、さらに言えば人間にとって大切なものとして「自由」の概念が取りあげられ、「自由」を実現するためには「倫理的直観」(moralische Intuition)や「倫理的想像力」(moralische Phantasie)が必要とされた。そして「自由な人間」(Die freie Mensch)について、次のように述べられている。

「我々の生活は、自由と不自由な行動から成り立っている。しかし、我々は、人間の本性を最も純粹にはっきりと示されたものとしての自由な精神に達しなければ、人間の概念を最後まで考え抜いたことにはならない。我々は、自由であるかぎりのみ、真の意味での人間なのである。」<sup>(30)</sup>

さらにシュタイナーは、そのあとで「個人があらゆる倫理性(Sittlichkeit)の根源であり、地上の生命の中心である」<sup>(31)</sup>と主張し、自分の考え方の立場を「倫理的個人主義」(Der ethische Individualismus)としたのである。

以上述べてきたように、シュタイナーは、『自由の哲学』という哲学書によって、ゲーテの認識論というかたちで自分の個人的な確信を述べるゲーテ研究者から、認

識論を「倫理的個人主義」の立場から論じる哲学者に姿貌していったのである。

#### 四、ワイマールにおける外的生活と内的変貌

ワイマール時代について、シュタイナーは、のちに次のように振り返っている。

「これまで根本において、私は、外的世界とともに生きるものがいかに少なかったかを、実感せざるえなかった。私は活発な交際から身を引いたとき、私の従来から慣れ親しんできた世界は、私が内面で直観していた精神的世界だけであることを、当時繰り返し思い知らされたのである。後者の世界(精神的世界―引用者註)とは、私は容易に自分を結びつけることができた。」<sup>(32)</sup>

このように述べたあとで、さらに彼は当時のことについて次のように述べている。

「私は自分自身の心(Seele)とともに、外的世界に隣接するひとつの世界に生きていた。そして外的世界と何らかのかかわりを持つときは、いつもひとつの境界を越える必要があった。私は非常に活発な交

際の中にいたが、いずれの場合にも、自分の世界から扉を開くようにして、その交際の中へ入っていかねばならなかった。そのために、外的世界に踏み込むたびに、私は訪問者であるかのような心境を味わうのだった。」<sup>(33)</sup>

このようなシュタイナーの自己描写に従えば、彼は、外的世界とは別に、閉じこもることのできる自分の内的世界、つまり精神的世界を持っており、彼自身もその世界の中にいるときのほうが、外的世界とかかわるよりも安心できたのである。つまり、シュタイナーは、一面では内向的な性質を有していたことになる。その性質を有していたからこそ、彼は、彼の内的世界に閉じこもることによって、ゲーテの自然科学論に一人で独自の認識論的な解釈を加えることができやすかったし、またカントやフイヒテなどの認識論も一人で研究しやすかったのであろう。

しかし、シュタイナーは、ただ単に内向的な性質を持つ青年ではなかった。彼は、ウィーンにおいてもそうであったように、他面では、外的世界では「訪問者」的な気持ちであったが、活発な人間的交流を行う青年でもあった。

自叙伝によれば、シュタイナーは、ワイマールにおいて、哲学者や政治家をはじめ、演劇家や画家や詩人などといった、さまざまな分野の人々と交流を重ねている。そうした人々との交流は、さまざまな分野に彼の目を開かせることになったばかりか、その後の彼の人生にとって少なからず影響を与えている。その中でも特に、彼の思想形成のうえで大きな影響を与えた人物としてあげられるのは、哲学者ハルトマン (Hartmann, E. von) と動物学者・思想家ヘッケル (Haeckel, E. H.) と哲学者ニーチェ (Nietzsche, F. W.) であろう。シュタイナーは、このような当時の著名な人々の思想を単に彼らの著作を通して理解しようとするのではなく、直接に彼らと会ったり、手紙を書いたりするような交流を行っていた。穿った見方かもしれないが、特に、このような当時の著名な人々との人間的なかわりを通して、ゲーテおよび認識論の研究者として頭角を表しつつあったシュタイナーは、いわゆる世の中に出る機会を探っていたのではないかと考えられる。もちろん、彼自身もそのような趣旨のことをまったく語っていない。しかし、彼の人生における行動を眺めてみると、どうもそのように思われてならないのである。と言うのも、当時において彼は、

それほど思想的に陶醉しているわけでもないのに、有名な人物やサークルであれば、積極的にそれらとかかわりになるうと行動し続けているからである。ハルトマンについては、シュタイナーは、ウィーン滞在の折から手紙を出し続けており、移住するまえにワイマールへ下見に行つたときに、ハルトマンを訪問している。『自由の哲学』が刊行された折には、彼はそれをすぐさまハルトマンに献呈している。その著作は、ハルトマンにとって理解しにくかつたようで、彼はそれを批評とともに送り返している。また、ヘッケルについては、何年間もの文通のあと、一八九四年に、イエナで催されたヘッケルの六十歳の祝賀会のときに、シュタイナーはヘッケルと会談している。そして、ニーチェについては、シュタイナーは、一八九四年に、ニーチェの妹の案内で彼の部屋を訪問している。そのときには、ニーチェはすでに精神的錯乱状態に陥っていたという。シュタイナーは、その翌年には、ニーチェに関する著作『フリードリヒ・ニーチェ

—同時代との闘争者—』(Friedrich Nietzsche: ein Kämpfer gegen seine Zeit)を刊行している。

このような著名人との交流に関するシュタイナーの真の意図を、今から正確に推し量ることはできないけれど

も、結果的には、ワイマールでの著名人をはじめさまざまな人々とかかわりが、すなわち彼の言葉で言えば外的世界におけるかかわりが、次第に彼の内的な性質を変えていったようである。そのことに関連して、シュタイナーは自叙伝の中で次のように回想している。

「ワイマール時代の終る頃、私は、三十六歳になっていた。その十年ほどまえから、私の心(Seele)には深刻な変化が萌しはじめていた。……(中略)……

物質的世界の事物や現象を、正確かつ厳密に観察する私の能力が形成されてきたのである。このことは、学問の分野でも外的な生活の分野でもあてはまった。それ以前には、精神に適した方法によって捉えられる幅広い学問的連関が、いとも容易に私の心の財産となつたけれども、対象を正確に知覚し、そして特にその知覚したものを記憶するためには、激しい緊張が必要であった。今や、事態は一変した。以前には欠けていた、感覚によって知覚できるものに対する注意力が、私の中に目覚めたのである。事細かなことが私にとって重要になってきた。感覚界には、感覚界のみが開示できるような何かがあるに違いない、と私は感じていた。思想やその他の内的に出現する心的内容を媒介と

せずに、それ（感覺的世界―引用者註）が伝える内容だけによってそれ（感覺的世界―引用者註）を知るところこそ、私は理想と考えた。

私は、人生の転機を他の人よりも非常に遅い年代に経験した、ということに気づいた。」<sup>(34)</sup>

この彼の叙述に従うなら、以前にはシュタイナーは、「感覺的世界」、つまり目に見える現実界とのかかわりをあまり得意としていなかったことになる。ところが、三六歳頃になって、彼は、人々よりかなり遅れて、「感覺的世界」とうまくかかわれるようになったという。その点について、彼はかなり独特な言い回しで語っているわけであるが、簡単に言えば、彼は外的世界と積極的にかかわっていきける自信を持つようになったのである。

そこで、シュタイナーは、ゲーテの研究に一区切をつけたとき、自分の内的世界に閉じこもるのではなく、むしろ自分の見解を外に向かって積極的に語ろうと決心して、ワイマールから大都市ベルリンに移住することになる。そのことについては、自叙伝の「私は、自分の意見を雑誌に主張する可能性を求めて、ワイマールからベルリンに移った」<sup>(35)</sup>という彼の記述が、それを裏づけている。

おわりに

以上、シュタイナーの「第一生活期」と呼ばれる期間のうち、大学を卒業する頃から、彼の「第二生活期」の終りまでの期間の思想形成とその基礎となった体験について論じた。ここでは、まず、これまでの論究を簡単に整理してみよう。

大学卒業後のシュタイナーは、ウィーンにおいて多数のサークルに参加し、さまざまな分野の人々と交流している。そうした人々とのかわりから、彼は、思想的に少なからず影響を受けただけでなく、『ドイツ週報』という雑誌の編集と執筆の機会を得ている。この雑誌の仕事の体験は、ベルリン時代以後の雑誌や新聞の編集に携わるうえで大いに役立つことになる。また、キュルシュナー教授によって紹介された家庭教師という職も、長期間にわたって同じ子どもを実際に指導した点で、彼にとって貴重な教育体験となった。

ウィーンにおいて、シュタイナーは、すでに『ドイツ国民文学全集』におけるゲーテの自然科学論の仕事に励んでいる。彼は、ゲーテを読み進める中で、ゲーテにしてみれば自明の体験であったものを認識論的に解釈を加

えていった。その結果、一八八六年には、彼は『ゲーテの世界観の認識論要綱』をまとめるまでに至っている。そののち、彼はワイマールに移住し、そこでよりいっそうゲーテ研究に打ち込んでいる。そして一八九七年には、彼は、ゲーテ研究の結果とも言うべき、『ゲーテの世界観』を刊行するに至っている。

さらに、ワイマールにおいて、シュタイナーはゲーテだけにとどまらず、他の人々の思想の著作も読み進んでいる。その中でも、特にカントやフィヒテなどの認識論の研究は、ゲーテのものと並んで、本格的なものであった。と言うのも、彼がドイツ哲学者の認識論を熱心に研究したのは、もちろん実科学校時代および大学時代からの学問的関心に関連するものであるが、ある意味ではゲーテ研究を継続・発展させたものでもあったからに他ならない。そのような認識論の研究は、一八九四年の『自由の哲学』というかたちで一応の完成をみることになる。その研究によって、シュタイナーは、ゲーテを盾にしながら自分の認識論を表明するゲーテ研究者であったとともに、ドイツ哲学者の認識論をも盾にしながら「倫理的個人主義」の立場から自分の認識論を表明する哲学者にもなったのである。つまり、ワイマール時代の

シュタイナーは、認識論という衣をきせながら、少年時代の確信を著作というかたちで公的に語りはじめたのである。そののち、彼が認識論という衣を脱ぎ、宗教的思想の影響を受けながら自分の確信を自分の言葉で語るとき、そのときが彼独自の「人智学」の誕生なのである。その意味で、ワイマール時代には、のちの「人智学」における認識論的な基本的枠組はほとんど完成していたと言えるであろう。

また、ワイマール時代のシュタイナーは、「ゲーテ・シラー文書館」の仕事および自分の研究の傍ら、ウィーン時代と同様に、さまざまな分野の人々と積極的に交流している。しかも、ワイマールにおいては、彼は、その時代のかなり著名な人々とも交流できるようになっていた。そのような交流に対する彼の意図は正確には計り知れないところもあるが、結果として、そうしたさまざまな分野の人々との交流、つまり外的世界ないしは現実界とのかかわりは、内向的な性質を合わせ持っていたシュタイナーを、安心してより外向的な生活をできる人間に変貌させていくことにつながったのである。そして、彼はゲーテ研究の一応の完成を機に、自分の主張をより公にすべく、それまでの業績と人間関係を生かしながら、

大都市ベルリンに移り住むようになったのである。

次に、本稿で主に論述してきたシュタイナーの大学卒業後からワイマール時代の最後まででの期間の中で、特に彼の教育思想形成上、最も重要であると考えられる点として、筆者は次の三点を指摘しておきたい。

第一に、シュタイナーは、若いときに経済的な理由という消極的なものであったが、長期間にわたって子どもと家庭教師の体験を持ったということである。ドイツの教育学者ヘルバルト(Herbart)もそうであったように、シュタイナーにとってもそれは、教育思想を形成する上で貴重な教育実践の体験となった。特に、シュタイナーの場合、教育の主な対象となった子どもが障害児であったということあり、彼は、教育における精神的・心的なものとの肉体的なものとの関連の重要性を確信するようになった。この確信は、のちの彼の教育思想における基本的な考え方のひとつになったのである。

第二に、ワイマール時代においてシュタイナーは、彼の教育思想の基盤となる「人智学」の認識論的な基本的枠組をほとんどつくりあげていたということである。彼は、ゲーテをはじめ、カントやフィヒテなどの哲学者の認識論に解釈を加えることによって、自分の考え方を表

明しながら、自分のそれを構築していった。そして、彼は、少年時代からの確信であった、「感覚的世界」とその背後に隠された「精神的世界」という二つの世界の存在を、彼なりの認識論によって説明できたのである。

第三に、ワイマール時代の終り頃までには、シュタイナーは、現実界の中で生きていく自信を持つようになったということである。それ以前の彼は、まったくの内面的な人間では決してなかったが、一面ではかなり内面的な性質を合わせ持っていたということも事実である。なぜなら、そのような性質であったからこそ、彼は、幼年時代から異様な体験をしたり、<sup>(36)</sup>カントやフィヒテなどの難解な哲学書を熟読できたと考えられるからである。ところが、ワイマール時代には、彼は、ゲーテの全集に携わった業績および認識論に関する著作の業績によって生じた自信とともに、さまざまな分野の人々との交流も相俟って、外的な現実界の中でも自信を持って生きていける人間に変貌していったのである。そこで、彼は七年前のワイマールの滞在を終えて、自分の意見を主張すべくベルリンに移住したのである。

最後に、今後の課題について簡単に述べておきたい。本稿によって、シュタイナーの生涯のうちの「第二生活

期]までの教育思想の形成について明らかにしたことになる。したがって、次稿では、「第三生活期」において彼がどのような活動をしながらいかなる思想を形成していったのかについて研究を進めたいと考えている。

註

- (1) 自由ヴァルドルフ学校 (Freie Waldorfschule) の教師であるカルルグレン (Carlgren, F.) に従えば、シュタイナーの生涯は七つの期間に大きく区分されるという。すなわち、「第一生活期」(1861-1889)、「第二生活期」(1890-1896)、「第三生活期」(1897-1902)、「人智学第一発展期」(1902-1909)、「人智学第二発展期」(1910-1916)、「人智学第三発展期」(1917-1923)、「人智学第四発展期」(1923-1925) である。(Carlgren, F., Rudolf Steiner und die Anthroposophie, Dornach, 1975.)  
なお、「第一生活期」における入学卒業までの時期に関する研究は、拙稿「シュタイナーの教育思想の形成(1)」(『教育方法研究会編『教育方法学研究』、第八集、一九八八年)に所収されている。
- (2) シュタイナーを学生時代に指導した大学教授シュレーアーは、その論説に対して、「あなたは再びオーストリアにカトリック教会主導の教育政策を持ち込みたいのですか?」という疑問を彼に呈したという。(Steiner, R., *Mein Lebensgang*, Dornach, 1983, S. 110.)
- (3) たとえば、オーストリア・マルクス主義を代表するひとりであったアドラー (Adler, V.) である。
- (4) 詳しくは、拙稿「シュタイナーの教育思想の形成(一)」を参照。
- (5) Steiner, R., *Mein Lebensgang*, S. 78.
- (6) *Ibid.*, S. 80.
- (7) *Ibid.*, S. 79.
- (8) *Ibid.*
- (9) Steiner, R., *Einleitungen zu Goethes Naturwissenschaftlichen Schriften*, Dornach, 1987, S. 12.
- (10) *Ibid.*
- (11) *Ibid.*, S. 10.
- (12) *Ibid.*
- (13) Steiner, R., *Mein Lebensgang*, S. 82.
- (14) *Ibid.*, S. 85.



- (15) Ibid., S.88.
- (16) Steiner,R., Grundlinien einer Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung: Mit Besonderer Rücksicht auf Schiller. Zugleich einer Zugabe zu Goethes Naturwissenschaftlichen Schriften in Kürschners Deutscher National-Literatur, Dornach, 1960, S.114.
- (17) Ibid., S.128.
- (18) Steiner,R., Briefe I 1881-1890, Dornach, 1985, S.141.
- (19) ショーペンハウエルの全集は一八九四年に『パウル』の選集は一八九七年にロッタ書店から刊行された。
- ショーペンハウエルの思想は、のちのシュタイナーの人間観に大きな影響を与えている。たとえば『自由のヨーロッパ』の名前は、シュタイナーの『自由の哲学』(Die Philosophie der Freiheit)や『教育の基礎と心の一般問題』(Allgemeine Menschenkunde als Grundlage pädagogik)の著者の中で、しばしば引用されている。また、『パウル』の思想は、シュタイナーの教育観に影響を及ぼしている。

- たとえば、『パウル』の名前が、シュタイナーにとっての教育に関する最初の著作である『精神科学の観点から見た子どもの教育』(Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft)の中で引用されている。キリジダ、シロタヘナーが『パウル』の幼児教育や教育心理学について。(Steiner, R., Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft, Stuttgart, 1948, S.27. <筑波大学三田英生氏蔵>)
- (20) Steiner,R., Mein Lebensgang, S.76.
- (21) Ibid., S.115.
- (22) Steiner,R., Briefe I 1881-1890, S.141.
- (23) Steiner,R., Wahrheit und Wissenschaft: Vorspiel einer «Philosophie der Freiheit», Dornach, 1967, S.9.
- (24) Steiner,R., Mein Lebensgang, S.122.
- (25) vgl. Hemleben,J., Rudolf Steiner, Hamburg, 1961, S.64.
- (26) Emmichoven, F. M. Z. van, Rudolf Steiner, Stuttgart, 1961, S.149.
- (27) Steiner, R., Die Philosophie der Freiheit :

Grundzüge einer modernen Weltanschauung.

Seelische Beobachtungsergebnisse nach naturwissenschaftlicher Methode, Dornach, 1962, S.7.

Ibid.

(29)(28) たゞせば、「認識とは、知覚と概念との総合である」(Ibid., S.73.)と述べられてゐる。

Ibid., S.133.

Ibid., S.136.

Steiner,R., Mein Lebensgang, S.175.

Ibid., S.175f.

Ibid., S.236.

Ibid., S.181.

(36)(35)(34)(33)(32)(31)(30) 拙稿「シュタイナーの教育思想の形成(1)」、六九

— 一〇〇頁。